

「子ども育成学」試論

An Essay on Science of Child Development and Education

宮田 伸朗

MIYATA Shinro

はじめに

富山国際大学子ども育成学部は、「子ども育成」にかかわる教育・研究を目的として、2009（平成21）年4月に開設された。設置場所は、富山短期大学が立地する富山市願海寺地内の呉羽キャンパス。学校法人富山国際学園では、富山国際大学の改組再編の一環として、また富山短期大学の発展型（主に幼児教育学科・福祉学科の発展型）として位置づけられている。

18歳人口の減少と大学全入時代を迎えた近年、保育・幼児教育系の短期大学を四年制の学部へ改組する事例は数多い。また、従来の教育系学部や福祉系学部でも、保育・幼児教育分野を付加して複数の資格課程を開設する事例も目立つ。それらの多くでは、学部・学科の名称に「子ども（こども）」、「子ども（こども）教育」、「子ども（こども）保育」、「子ども（こども）福祉」などが用いられている。ただし、「育成」を付した事例は、ほとんど見当たらず、富山国際大学子ども育成学部は、本邦での初出事例と見られる。

「育成」は、「児童健全育成」や「次世代育成」のように、これまで主に児童福祉分野や子育て支援・少子化対策分野で使用されてきている。また「子ども（こども）」は、日常生活でも頻繁に使用され理解されているが、学部名称としては比較的新しい名称である。「子ども」と「育成」を接合した「子ども育成」は、特に違和感もなく受止められ、何となく理解されるように思われるが、その意味内容は必ずしも明解にされているわけではない。

いずれにしても、学部・学科名称に「子ども育成」を冠し、「子ども育成」に関する教育研究を標榜する富山国際大学子ども育成学部は、その教育・研究活動を通して「子ども育成」の意味内容を明らかにし、「子ども育成学」の構築をめざさなければならない。本稿では、第一に子ども育成学部の設置認可申請書¹⁾における「子ども育成」の意味内容を確認し、第二に「子ども育成学」構築への取り組みのための課題整理を試みるものである。

設置認可申請書における「子ども育成」

富山国際大学子ども育成学部子ども育成学科の「設置の趣旨等を記した書類」は、2006（平成

18) 年度末から、筆者宮田伸朗（(当時) 開設準備室長）によって起草、作成が開始された。その後、足掛け 3 年にわたる文部科学省との事前相談や審査、学園内での検討などを経て、2008（平成 20）年 9 月に認可申請書（補正）として最終提出され、同年 10 月末に認可されたものである。（以下、「富山国際大学子ども育成学部設置認可申請書」を引用しながら記述する。）

(1) 当初の構想から認可申請までの経過

「子ども育成」という学部・学科名称は、学部における教育・研究内容、つまり乳幼児期の保育・幼児教育から小学校教育に至る子どもの成長・発達と、それを取り巻く家庭・地域・社会などの環境を統合的に捉え、子どもと環境の双方に総合的に働きかけていくことの重要性の認識から名づけられたものである。「子ども」は、「児童」という行政的・制度的表現ではなく、日常生活上の常用的表現として用いられ、「育成」は、「教育」や「保育」、「福祉」という縦割りの個別分野を表す表現ではなく、それら三分野を包含し、子どもの成長発達にかかわるすべての分野を統合的に表現する用語として用いられたものである。

教育組織としては、当初「保育教育専攻」と「社会福祉専攻」の二つの専攻を擁する子ども育成学科の設置が構想されていた。しかし、文部科学省（大学設置事務担当窓口）への数度にわたる事前相談の中で、保育教育専攻における「教育学」の学位と社会福祉専攻における「社会福祉学」の学位という、異なる二つの学位を一つの学科で授与することは制度上成り立たないことが明らかになった。また、教育系学部とする場合には、社会福祉系の授業科目が数多く開講されるのであれば、設置認可が困難であると見込まれる旨の示唆も投げかけられた。

このため、学部の目的、教育・研究の目標、教育課程・授業科目など子ども育成学部開設の根幹部分を、教育と保育・幼児教育を主体とするものに変更することとした。さらに、社会福祉系の授業科目数を、保育士及び社会福祉士資格にかかわる指定科目として必要となる最低限度までに縮減し、学部・学科の主要な科目である教育系科目と保育・幼児教育系科目に対して、付加的な科目として位置づけることになった。

そして、教育と福祉の統合をめざして「子ども育成」を掲げる学部を象徴する授業科目として 1 年次に「子ども育成入門」及び「子ども育成論」、3 年次に「子ども育成専門演習」を系統的に開設し、さらに 3・4 年次の「卒業研究」を「子ども育成の研究」として位置づけるなど、教育課程全体の中心柱に「子ども育成」の視点と科目を置くことにした。

さらに、2008（平成 20）年 8 月の大学設置審議会の「是正意見」や「改善意見」では、最低限度に縮減されたとはいえ、教育課程の中に存在する社会福祉系授業科目の位置づけを、より明確にすることが求められた。翌 9 月の専門委員による面接審査は、「意見」に対する説明・回答の場であり、設置認可申請書の提出に向けての最終確認と調整の場としても位置づけられていた。そこで、富山国際大学はそれまでとは逆に、福祉分野の教育研究を「子ども育成」における必要不可欠の教育研究として位置づけ、積極的にその意義を主張する内容に回帰させることにした。実際には時間的な制約や事務手続き面での事情などもあって、申請書の内容の大幅な修正は困難であったため、やや抑制的な表現にならざるを得なかったものの、面接審査では、福祉分野の必要性を補強した本学からの説明が認められ、「設置の趣旨」の最終内容に盛り込まれて提出され、設置認可されることになった。

これらの経過に見るように、当初は教育（保育・幼児教育）と福祉の統合の視点に立ち、小学

校教育、保育・幼児教育、社会福祉の複数資格を持つ子ども育成の人材養成をめざす構想から出発したものの、学内外の紆余曲折を経て、ともかくも2009（平成21年）4月、学部・学科名称に「子ども育成」を冠し、「子ども育成」に関する教育・研究を標榜する富山国際大学子ども育成学部がスタートした。設置認可申請書に記された「設置の趣旨」は、決して完成形としてではなく、むしろ経過記録的なものとして受止めなければならない。

そのことを前提にした上で、以下「設置の趣旨等を記した書類」に沿いながら、項目ごとに「子ども育成」の意味内容について、若干の考察を試みる。

（2）学部・学科の名称と目的

学則に掲げる学部の目的は、「心身ともに健やかな子どもの育成を通して地域社会の発展に貢献できる人材の養成を目的とし、保育・教育など子ども育成とその環境に関する基礎的・専門的・実践的教育研究を行う」（学則第1条の2第2項）とされている。

「心身ともに健やかな子どもの育成を通して」の表現は、児童福祉法第1条第1項「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない。」及び第2条「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う」の条文に由来している。

「地域社会の発展に貢献できる人材の養成」の表現は、富山国際大学の建学の理念とされている「常に時代の潮流に対応し、国際社会及び地域社会の発展に貢献する人材の養成」を子ども育成学部において具現化し、既設の現代社会学部の「学部の目的」を記した表現に平仄を合わせたものである。また、子ども育成学部が養成する人材が、次の時代と社会を担う存在である健やかな子どもを育成することを通して、間接的に明日の地域社会づくりに貢献するという意味も込められている。

「保育・教育など子ども育成とその環境に関する基礎的・専門的・実践的教育研究」の表現も、形式的には現代社会学部に平仄を合わせたものである。実務的な制約から、表現としては「保育・教育など」として、「など」に「福祉」の意味を込めることにせざるを得なかったが、字義どおりに読んだ場合、そこまで踏み込んで読み取ることまではできない。また「子ども育成とその環境」という表現については、「環境」に「子どもを取り巻く家庭・地域・社会」の意味を持たせるとしたら、それだけで「福祉」の意味内容まで含ませるのは、やや無理がある。その上で「子ども育成」という表現自体に、「教育と福祉の統合」の意味を持たせようとするれば、「子ども育成」と「その環境」というつながりも、やや理解しにくいものになってしまう。むしろ、「保育・教育・福祉など子どもの成長発達とその環境に関する」とした方が、より適切であったかも知れない。

（3）学部・学科の名称

学部・学科の名称について、「設置の趣旨」の文書は、第一に学則の「学部の目的」に示されたとおり、「子どもの育成」が学部の教育・研究対象の中心をなすものであることを、理由に挙げている。続けて、「子どもの育成の理論・内容・方法」、「子どもの発達と環境」、「子ども育成の相談支援」などの授業科目区分、さらには実践的な実習科目や富山の実践・活動に学ぶ授業科目群などから構成されている「教育課程の編成の考え方及び特色」をふまえて、『子どもの育成』をコアにしなが、保育・教育・福祉の関連する諸領域にまで視野を拡大した学習ができ、複雑多様化する時代と社会の要請に応える確かな人材の育成をめざす」としている。

そして、子ども育成学部においては、「子どもの育成」にかかわる教育・研究がコアとなっていることから、学部名称及び学科名称を「子ども育成学部子ども育成学科」とすると結論づけている。「名は体を表す」とするならば、「子ども育成学部」という学部名称は、子どもの育成にかかわる保育・教育・福祉の幅広い領域にまたがる学際的な教育・研究を行うにふさわしい名称であると言えるかもしれない。

ただし、1学部1学科であることもあって、学部名称と学科名称が同じとされているが、将来的に複数の学科が設置されることになれば、それぞれの学科の教育・研究内容の共通性と違いを明確にする必要が出てくる。そうなれば、学部名称に掲げる「子ども育成」の意味内容も、より明確になってくるものと考えられる。

なお、学部学科及び学位の英訳名称については、**Child Development and Education** を充てることとしている。直訳すれば、「子どもの発達と教育」となる。逆に「育成」を直訳すれば、**upbringing** または **rearing** となるが、これは子どもの「世話」や「養育」という意味合いが強くなる。子ども養育の社会的な支援まで包含する「児童健全育成」や「次世代育成」という用法や子ども育成学部の設置の趣旨に適合するのは、**Development and Education** の方である。

(4) 子ども育成学部の特色

子ども育成学部の特色として、「設置の趣旨」は三つの点を挙げている。第一に「富山の私学初の、次世代育成を担う専門職業人の養成」、第二に「子ども育成の今日的課題に対応した教育研究」、第三に「富山の地域性をふまえた特色教育」である。

第一の特色は、官学志向の強い富山県において、私学として「『心身ともに健やかでたくましい子どもの育成』についての専門的知識・技術、崇高な使命感と職業倫理を備えた人材を育成」という学部の人材育成機能に着目した特色である。

第二の特色は、学部の根幹である教育・研究に着目した特色である。ここではまず、子ども育成をめぐる今日的課題は、「保・幼・小の連携と一貫性」及び「家庭・地域との連携・協力」であるとしている。子ども育成学部では、「それらの課題に対応して『子どもの生活・発達・学びの連続性をふまえて、一貫した教育指導ができる人材』及び『よりよい子どもの育ちのために、家庭・地域と連携・協力できる人材』の育成」をめざすとしている。さらに、その基盤として「『子ども育成の時系列的視点（子どもの発達主体としての連続性の視点）と子ども育成の空間的視点（子どもの育成をめぐる家庭・地域・社会環境の視点）』をふまえた教育研究の展開を図る」としている。それらを受けて、教育課程の編成においては、「前者の視点から乳幼児保育・幼児教育・小学校教育に関する科目」を「後者の視点からは発達と環境・相談援助・自立支援に関する科目」を系統的に配列するとしている。

ここでは、「子ども育成」の意味内容について、核心に迫る考えが示されている。つまり、「時系列的視点＝子どもの発達主体としての連続性の視点」と「空間的視点＝子どもの育成をめぐる家庭・地域・社会環境の視点」である。そして、前者では保育（幼児教育）学や教育学の教育・研究分野が、後者では社会福祉学の分野が念頭におかれている。子ども育成学部が特色とする「教育と福祉の統合」という考えの基点が、ここに示されている。

第三の特色は、地域と連携し、地域に密着した教育のあり方を示している。地元富山の特色ある保育・教育・福祉の実践活動に学ぶ特別活動や体験的学習の積極的導入は、「子どもの育成」に

かかわる教育・研究に求められる「理論と実践の連携・統合」にも対応するものである。

(5) 教育目標と人材像

子ども育成学部の教育上の到達目標には、「心身ともに健やかな子どもの育成に貢献できる有為な人材の養成」が掲げられている。より具体的な人材像として、以下の四点が示されている。

- ① 子ども育成の専門家としての確かな資質能力と学びの精神を備えた人材
- ② 子どもの生活・発達・学びの連続性をふまえて、一貫した教育指導ができる人材
- ③ よりよい子どもの育ちのために、家庭・地域と連携・協力できる人材
- ④ 地域に愛着と誇りを持ち、地域に根づいた保育・教育の実践をめざす人材

これらの人材像のうち、②から④までの三つは、前項の「学部の特色」に対応したものである。特に②と③は、子ども育成をめぐる「時間軸の視点」と「空間軸の視点」の統合という、子ども育成学部の人材養成教育の核心となる人材像となっている。

(6) 研究対象と研究目標

子ども育成学部として「研究対象とする中心的な学問分野」は、「乳幼児期から児童期に至る人間形成（保育・教育）にかかわる分野」であり、「子どもの心理、身体、健康、発達、教育、家庭、地域、福祉、社会など総合的学際的な研究分野」とされている。その中心的な学問分野として、「教育学、保育学、教育心理学、教育社会学、教科教育学、特別支援教育などの教育学の分野」、さらには「法学、社会学、健康科学、社会福祉学など教育学に近接し、一部重なり合う多様な関連分野」を挙げている。ここでは、先に記した設置認可申請の経緯の中で、あえて教育学を中心とする記述になっているが、一方で「総合的学際的な研究分野」としていることから、教育と福祉を統合した学際的な新しい学問分野「子ども育成学」の構築を構想していることがうかがえる。

研究上の到達目標には、「北陸地域における子どもの育成に関する実践的研究交流のセンターとして機能」していくことを掲げている。さらには、地元富山の「特色ある地域実践をフィールドにして、それら優れた実践の普遍化、科学化をめざし、その成果を地域や全国に発信し、21世紀のわが国の次世代育成と育成環境づくりに貢献することをめざす。」として、地方大学でありながら、子ども育成の分野での先進的な役割発揮への意気込みを示している。それと同時に、教育・研究の成果を地元で「社会還元」していくことにも意を尽くそうとしている。学生に対する教育と同様、地域における実践・研究活動と密接に連携・交流しながら、子ども育成学の構築、そして実践へのフィードバックという好循環をめざしているわけである。そうした仕組みは、実践科学である教育学と社会福祉学の統合の上に立つ学際的研究としての子ども育成学の構築にとって、不可欠であると考えられる。

実際に子ども育成学部は、2009（平成 21）年 4 月の学部開設と同時に、「『子ども育成学』の構築をめざして、子ども育成に関する調査研究を行うとともに、地域における教育・福祉・保育などの実践・研究活動との交流・連携を図り、もって地域社会の発展に貢献することを目的」として「子ども育成研究交流センター」（富山国際大学子ども育成学部子ども育成研究交流センター設置運営要項）を設置している。

「子ども育成学」構築に向けての課題

これまでに見たように、「子ども育成学」の構築は、まだ緒に付いたばかりである。子ども育成学部の運営も、ようやく1年を経過しようとしているところであり、引き続き完成年度（2012（平成24）年度）に向けた開拓的努力が求められている。そのためにも、次の三つの課題の整理と解明が必要である。

第一には、学部の名称にかかわる課題である。「子ども」とは何か、「育成」とは何か、さらに「子ども育成」とは何かを、明らかにすることである。第二には、学部の目的と教育課程の適合性にかかわる課題である。学部の教育課程が、学部の目的である「心身ともに健やかな子どもの育成を通して地域社会の発展に貢献できる人材の養成」を担保するものとして編成されているかを、検証することである。第三には、「子ども育成学」の内実にかかわる課題である。教育と福祉を統合し、関連科学をも包含する学際的研究とはどのようなものか、その構築に向けた過程の中でその内実を明らかにしていくことである。これら三つの課題は、互いに関連し合う課題であり、その解明は必ずしも容易ではない難題である。

(1) 学部名称にかかわる課題—「子ども育成」とは？

「子ども」とは何か？ 網野武博によれば、「子」は古来、頭が大きく手足がなよなよしている者の意を表し、幼な子、小さき者、ひいては若者の意味で用いられてきた²⁾。これに「供」がつくと、上下関係や強者対弱者の意味を込めて用いられてきたという。そして「子ども」という言葉の本質的な意味は、「自立していない時期の人間」または「自立途上の人間」というところにあるとしている。また、今日我が国における子どもに関する法制度は多岐にわたり、子どもの呼称や定義、年齢幅の区分や上限も多様である。

「育成」とは何か？「新大字典」によれば、「育」は「赤子を養って肉（を付け育てる）」の意味、「成」は「草木が老成し、秋に至って熟す」ことから「盛んになる、出来上がる」の意味を表わすものとされている³⁾。よって「育成」は、生まれたばかりの乳児から成人に出来上がるまでに「養い育てること」という意味になる。

これらの「子ども」と「育成」をつなぎ合わせた「子ども育成」とは、「自立していない子どもを養い育て、自立に至らせること」になる。つまりは、乳幼児期から始まって、児童期、青年期の自立に至るまで、肉体的・精神的・社会的にも未自立な子どもを保護、養育、保育、教育、支援して自立した大人に至るまで育て上げることである。学部名称の「子ども育成」は、一人前の人間に育て上げる営み＝「人間形成の営み」を表現している。「形成」は、「保護、養育、保育、教育、支援」などを包含した、より上位の概念であり、より包括的な機能である。仮に「人間形成学部」という学部名称を付けたとすれば、より幅広い内容・領域を対象とする教育・研究をめざしていくことになる。「子ども育成」は、「人間形成」の中でも乳幼児期から小学校の時期頃までの児童の、成長発達を促す営みとして押さえておくことができる。より精緻な検討を続けていくことを、今後の課題としておきたい。

(2) 学部の目的と教育課程の適合性にかかわる課題—子ども育成の人材養成のあり方とは？

前述のとおり、学部の目的は「心身ともに健やかな子どもの育成を通して地域社会の発展に貢献できる人材の養成」である。教育上の到達目標にも、「心身ともに健やかな子どもの育成に貢

表1 教育課程の体系

区分・科目区分・授業科目群		ね ら い	設置の趣旨・人材像との対応・関連
教養科目	子ども育成の教養	現代社会を生きる主体的な生活者として、また子ども育成を担う専門職業人として必要な、幅広い知識と教養を身につける	子ども育成の専門家としての確かな資質能力と学びの精神を備えた人材
	現代の教養	人間理解を深め、現代社会における人間のあり方を考える	
	コミュニケーションと情報	他者理解を深め、自己表現とコミュニケーション能力を高める	
	体育	子どもと人間の幸福の基盤である心身の健康について理解を深める	
	演習	主体的学習体験を通して、生涯にわたる自己研鑽の基礎を養う	
専門科目	子ども育成の理論と実践	子どもの生活と発達、教育に関する専門知識及び子ども育成の実践力を身につける	子どもの生活・発達・学びの連続性を踏まえて、一貫した教育指導ができる人材
	子ども育成の理論	子どもの生活・発達・教育に関する理論を学び、専門知識を身につける	
	子ども育成の内容と方法	子ども育成の内容・方法・技術を学び、実践の基礎的能力を身につける	
	子ども育成の実習	子ども育成の実地での体験を通して、実践的能力を身につける	
	子どもの発達と相談支援	子どもの発達と環境の関係、相談支援のあり方、子ども育成における家庭・地域との連携の必要性について理解する	よりよい子どもの育ちのために、家庭・地域と連携・協力していける人材
	子どもの発達と環境	子どもの心身の発達や社会環境に関する理解を深める	
	子ども育成の相談・援助	子ども理解を深め、相談・支援に関する知識・技術を身につける	
	子どもと家庭・地域の自立支援	子どもと家庭の福祉、地域社会に関する理解を深める	
	富山の子ども育成	地元富山の特色ある保育・教育・福祉活動への参加体験を通して、地域の実践に学び、子ども育成における地域連携の重要性について理解する	地域に愛着と誇りを持ち、地域に根づいた保育・教育の実践をめざす人材
	子ども育成の研究	4年間の学びの集大成として、レポートの作成や発表を行うことを通して、生涯につながる自己研鑽と研究的態度を養う	子ども育成の専門家としての確かな資質能力と学びの精神を備えた人材

献できる有為な人材の養成」が掲げられ、「(5) 教育目標と人材像」で示したとおり、より具体的な人材像が四つ列挙されている。これらの人材像を実現する手立てとしての教育課程が、適切かつ必要十分であるかの検証が必要である。

設置認可申請書では、「設置の趣旨・人材像との対応・関連」を組み込んだ「教育課程の体系」を示して、学部の目的と教育課程の適合性を明らかにしている(表1)。授業科目の順序性や系統性については、それなりの工夫努力を凝らしたものの、必ずしも理想的な構成になっているわけではない。今後、教育課程を実際に運営しながら、学生の実態など現実的諸条件に対応しながら、より完成度の高いものに改善・向上を図っていかなければならない。

(3) 「子ども育成学」の内実にかかわる課題

第三の課題、「子ども育成学」の内実にかかわる課題は、「子ども育成学」の構築にかかわる三つの課題の中でも、まさに核心を突く課題であり、もっとも難しい課題である。教育と福祉を統合し、関連科学をも包含する学際的研究とは、一体どのようなものなのか?これから、課題の解明に向けて、学部の総力をあげて努力を積み重ねていかなければならない。

そのためには、「子ども育成」や「教育と福祉の統合」に関する先行研究、「こども(子ども)」や「教育と福祉の統合」を掲げる学会の設立趣旨と研究の集積、「こども(子ども)」や「教育福祉」を学部・学科名称に掲げる大学・短大等の教育理念・目的・教育課程などの把握と検討が不可欠である。ちなみに日本児童育成学会(1981(昭和56)年設立。2003(平成15)年度で活動休止)の英語表記は、Japanese Association of Child Development and Socializationである。子ども育成学部のChild Development and Educationとの対比についても、検討に値するものと考えられる。

おわりに

「子ども育成学」構築への道のりは長く、厳しい。しかし、学部・学科名称に「子ども育成」を冠し、「子ども育成」に関する教育研究を標榜して子ども育成学部を立ち上げた以上、自らの非力も省みず、これらの課題に立ち向かうことは、広く地域に子ども育成学部開設の趣旨と意義を宣明し、学生を募集し、養成教育を行う者の社会的使命である。引き続き、三つの課題の解明に取り組んでいきたい。

引用・参考文献

- 1) 学校法人富山国際学園、富山国際大学子ども育成学部設置認可申請書、(2008)
- 2) 網野武博、子ども家庭福祉とは何か、網野武博、柏女霊峰、澁谷昌史編著 児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度—児童福祉論(2009)、中央法規出版 pp.30-33
- 3) 上田万年、岡田正之、飯島忠夫、柴田猛猪、飯田伝一編著 新大字典(1993) 講談社